

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 25 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21510276

研究課題名（和文） ラテンアメリカにおける視覚文化の政治学

研究課題名（英文） The Politics of Visuality in Latin America

研究代表者

崎山 政毅（SAKIYAMA MASAKI）

立命館大学・文学部・教授

研究者番号：80252500

研究成果の概要（和文）：

ラテンアメリカにおけるメディアとしての視覚文化が有する力と、それによって引き起こされる政治的影響や社会的変容に関して、人々の感覚変容を生じせしめる潜在可能性をもつ「社会的な諸関係の凝集」として視覚文化をとらえる観点から、メキシコ合衆国チアパス州の先住民運動をとらえた映像、中米ニカラグア共和国における「混血国民」イデオロギー、南米ペルー共和国アマゾン地域の現地調査を通じて、その特徴を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：

The project articulated characteristics of visuality in Latin America, posing that the forces as 'aggregative social relations' have potentialities to bring sensual transformations, based on fieldworks in Mexico, Nicaragua, & Peru.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2010年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
年度			
総計	3,600,000	1,080,000	4,680,000

研究分野：複合新領域

科研費の分科・細目：地域研究・地域研究

キーワード：中・南アメリカ 先住民民族 映像 イメージ 視覚文化

1. 研究開始当初の背景

従来のラテンアメリカの政治文化研究では、視覚という共通の感覚を対象とし、視覚がもたらすさまざまな感覚の変容を介した政治的変動や文化混合といった状況を社会的に支える基盤にかんする分析が十分になされてきたとはいえない。

その主な理由のひとつに、視覚文化を政治的思惑や社会政策上の目的などをはじめとする、アルチュセールが述べるところの広義のイデオロギーおよびそれにまつわる何らかの意図を伝達する「道具」としてとらえ、

イデオロギーの目的を実現するための手段とする観点がほとんどであったことが挙げられる。

そのためメディアとしての視覚文化が有する力と、それによって引き起こされる政治的影響や社会的変容に関しては、精緻に論じられてこなかった。

さらに、視覚文化を映像の政治学的意味づけや社会学的分析のような視座からのみ問題化し、視覚そのものがいったい何であるのかという根底的な問いを欠いたままに、視覚文化のもたらした「影響」、「効果」あるいは

「後遺症」を症例的にとりあつてきたことを指摘できよう。

こうした研究上の欠落を①Robert Levine, Image of History: 19th and Early 20th Century Latin American Photographs as Documents (Duke University press, 1990)、②W. Watris, et al., Image and Memory (University of Texas Press, 1998)、③Jes Andermann, Mapas de poder (Beatriz Vierbo Editora, 2000)、④港千尋・伊藤俊治編『映像人類学の冒険』(せりか書房、1999年)といった、1990年代に一定の興隆を見せた研究成果を批判的に摂取するところから埋めていくこと、さらに地域研究における視覚論・映像論の歴史的な文脈を踏まえた開拓がもとめられていたこと、これらが研究開始時の背景である。

2. 研究の目的

本研究では、前記のように感覚変容を生じせしめる潜在可能性をもつ社会的関係の凝集として視覚文化をとらえることを起点とする。

これはラテンアメリカにおける視覚文化を対象とする研究が陥ってきた道具主義的・伝達論的なパラダイムのもたらした分析上の矮小化と方法的な狭隘さを克服するためである。

そのうえで、視覚文化の多様な表現を具体的な作品において検証することをつうじて、ラテンアメリカにおける視覚文化が惹起する政治的ダイナミズムや社会的変容を解明する。

そのために、映像・視覚文化に関してとりわけ20世紀において顕著な「運動」的な展開を文化的あるいは政治的に示してきた、メキシコ合衆国、ニカラグア共和国、ペルー共和国を主要な対象地として選定した。

そして、それらの地域での現地調査をつうじて資料・史料・作品を収集し、収集した資料・史料・作品を体系立てて分析・考察することで、ラテンアメリカの視覚文化がもつ特質、とりわけ政治性に関する諸特徴の歴史的な変容と現状とを「視覚論」をふまえて解明することを目的とする。

3. 研究の方法

第一に、1990年代以降に飛躍的な深まりを見せたにもかかわらず、2000年代に入ってからは一見頭打ちになってしまったかのような観を見せている、視覚論・映像論・写真論の総括的なサーヴェイにもとづく方法論的再検討をおこなう。

その検討作業をつうじて、歴史と伝統を有するラテンアメリカの映像・図像および写真を対象として、その政治的・社会的な役割を分析し、さらには動画・映画のもつ力能を考察する。

第二に、メキシコ革命の直後1920年代前半に、ときの文部大臣(公教育省長官)ホセ・バスコンセロスの汎アメリカ主義的ナショナリズム(ラテンアメリカ主義)の思想のもとで、ディエゴ・リベラやダビド・シケイロス、ホセ・クレメンテ・オロスコらを筆頭に実践された民衆壁画運動を再考する。

そしてこの壁画運動のラテンアメリカ全域への広がりをおさえつつ、1920年代以来の、街頭における画像・図像による政治表現を対象として、表象論・象徴論の面からの検討をくわえる。

さらにその影響をフィールドワークにおいて、できうるならばじっさいの作画者やグラフィティの作者への聞き取りをも含めて、調査・分析する。

第三に、1920年代からペルー共和国クスコ市にスタジオを開設してラテンアメリカの写真表現の新たな可能性を開拓した先住民ケチュア出身のマルティン・チャンピをはじめとした「写真のモダニズム」をとりあげる。さらにそれと同時代的な問題として、メキシコにおけるマヌエル・アルバレス・ブラボやティナ・モドッティ、エドワード・ウェストンらの「未来派」的写真作品をも考察の課題とする。

そのさい、ラテンアメリカ諸国で同時多発的に展開したアヴァンギャルドにおけるプリミティヴィズム木版画やカリカチュアといった種々の視覚的表現運動を排除することなく、同様の扱いをもって対象としていく。そしてそれらの映像・図像表現が有するマルチメディア的側面がいかなるものであり、どのような過程において影響力を持つにいたったのかを究明することをつうじて、ラテンアメリカにおける政治と芸術との関係性を明らかにする。

第四に、メキシコ合衆国・チアパス州で1994年以来先住民の存在権をうったえ高度な社会的・文化的自治を求めている「サパティスタ民族解放軍」、中米ニカラグア共和国・カリブ沿岸地域(カリブ沿岸自治政府統轄地域)に居住する先住民族であるミスキート人やスモ人、ラマ人らによる文化運動とアフリカ系混血であるクレオール人による文化とアイデンティティの表現、さらに南米ペルー共和国での「ネオ・インディヘニスモ」のリヴァイヴァルに端的にみられる、先住諸民族の存在を前面に打ち出した社会闘争における視覚文化の新たな役割を、資料収集をおこないつつ考察・分析する。

4. 研究成果

メンバー各人による以下の現地調査が本研究の成果の基礎となっている。

まず研究代表者・崎山および研究分担者・佐々木によるメキシコ合衆国メキシコ市特

別区および南東部チアパス州の旧都サンクリストバル・デ・ラスカサス市とオベンティック村の調査である。

つぎに、研究分担者・佐々木による、中米ニカラグア共和国の首都マナグア市・中西部の主要都市マタガルバ市・カリブ海沿岸地域の主要都市ブルーフィールズ市の調査である。さらに、研究代表者・崎山による南米ペルー共和国リマ市・プーノ市の調査、および研究分担者・原によるリマ市およびアマゾン地域の主要都市イキトス市での現地調査である。

それら各地での資料収集を主目的として、上記の方法を適用して、夏季を中心に、1回あたり2週間から1カ月にわたっての現地調査を各年度ごとに行った。

このようにプロジェクト期間中、毎年おこなった現地調査において収集した資料は、DVD・写真集・新聞記事・絵画・葉書・古書籍等多岐にわたるものであった。

それらプロジェクト・メンバーが収集してきた資料を、それぞれのジャンルとそのジャンルの形成過程に配慮をしながら、メンバーの間で情報を詳細にわたって確認・共有し、その上で論文等での発表を準備、刊行した。

各人ごとの成果は下記のとおりである。

研究代表者・崎山政毅は現代の視覚文化の源流となったラテンアメリカ・アヴァンギャルド運動、モダニズム写真およびニカラグアでの写真と政治の関係性をあつかった新知見を論文として刊行した。

とくに従来の研究に主要な傾向として存在していた言語を中心とした分析という傾向性の狭隘性を批判し、図像と言語実験と国民形成にかんする政治思想とが相互に深く関連していることを明らかにした。

また、メキシコ・チアパス州でのサパティスタ運動における「自治」の問題が、思想的には主権国家批判の方向性をもちつつも可視的な社会構成の試みとしては未だ表現されていないことを論じた。

さらにメキシコ、ニカラグアのみならず、1960年代後半から1970年代前半にかけての南米での政治と表現の関連性についても、論文公表を含めて、社会的に発信をおこなった。

研究分担者・原毅彦は、まずクロード・レヴィ＝ストロースの成果を批判的に再考し、その成果をふまえることで、アマゾン先住民を対象とした映像の問題を考察した。

そのさい、個人の次元と集団（エスニック・グループあるいは「人種」のレヴェル）での差異と共通性を意識しつつ、表象の有する力の効果とその限界について考察した。

また、そうした表象が、国家政治に影響を及ぼし、国際関係にさえも変動を引き起こすことを指摘した。

同じく研究分担者・佐々木祐はニカラグアの

「混血国民」イデオロギーを現地調査をふまえて対象化した。

そして、その分析作業をつうじて、そのイデオロギーの構成過程そのものに内在する、「混血国民」イデオロギー自体を内側から解体しうるような諸矛盾を、抉出することに成功した。

それによると、ニカラグアにおける先住民の同化政策の必要性を先住民農民反乱のなかで強調した報告書じたいが、一種のエスノグラフィであり、反乱鎮圧から先住民の社会的不可視化、つまり視覚文化からの先住民の追放あるいは周辺化が、「混血国民」イデオロギーの物質的基盤をなしていくことが明らかにされている。

さらに、そうした「混血国民」イデオロギーがニカラグアの民族構成にかんする支配的な文化的ヘゲモニーを生み出していることを、図像をつうじた歴史社会学の成果として分析し、その結果を学位論文にまとめ、京都大学に学位論文（博士（文学））として提出した。

また、上記の学位論文の執筆のかたわら、崎山とともにメキシコ・チアパス州のサパティスタ運動の拠点として知られるオベンティック村の状況を精細に調査することを通じて、現地の社会闘争が今抱え込んでいるネガティブな諸条件についての考察をおこなった。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 11 件）

- ① 崎山政毅「低迷する社会闘争、飛躍を狙う国家連合——ラテンアメリカの現状から」、ピープルズ・プラン、査読なし、57号、2012、76-85
- ② 崎山政毅「前衛の機械——エストリデンティスモとメキシコにおけるラジオ放送」、立命館文学、査読あり、623号、2011、32-48
- ③ 崎山政毅「《グローバル・ヒストリーズ》をめぐって——トランスアトランティック／トランスパシフィックな視点をもとに」、立命館言語文化研究、査読なし、第23巻2号、2011、1-9
- ④ 崎山政毅「喧噪の表現運動——エストリデンティスモ（1921-1927）の相貌」、立命館文学、査読あり、620号、2011、134-155
- ⑤ 崎山政毅「アンデスのアヴァンギャルド：思想史的文脈から」、立命館言語文化研究、査読なし、第22巻3号、2011、63-88
- ⑥ 崎山政毅「ウルグアイ現代史粗描——『ト

ウパマロス』による解放闘争を視軸に」、
情況、査読なし、第3期11巻2号、2010、
82-94

- ⑦ 崎山政毅「駄洒落によるブルジョア批判
——『ニカラグア反-アカデミー』運動
の諸相(資料つき)」、立命館言語文化研
究、査読なし、第21巻3号、2010、151
-184
- ⑧ 原毅彦「〈神話〉を見る、〈レヴィ=スト
ロース〉を聴く」、現代思想、査読なし、
第38巻第1号、2010、131-137
- ⑨ 佐々木祐「内破する映像群から——チア
パス地域先住民の社会実践をめぐる素
描」、京都大学GCOE国際共同研究報告書、
査読なし、2010、49-71
- ⑩ 佐々木祐「共同的映像のひろく可能性 —
—メキシコ・チアパス地域先住民の実践
から」、立命館言語文化研究、査読なし、
第21巻3号、2010、193-202
- ⑪ 佐々木祐「あたらしい自律空間の創出に
むかって——サパティスタ民族解放軍・
Primer Festival Mundial de la Digna
Rabia から」、インパクション、査読なし、
168号、2009、86-97

[学会発表] (計 4件)

- ① 佐々木祐「“Una consideración sobre
movimientos antisistémicos”」、
Programa del IIº Seminario
Internacional de reflexión y análisis
“Planeta tierra: movimientos
antisistémicos”、Universidad de la
Tierra、メキシコ合衆国サンクリストバル
・デ・ラスカサス市、2012年1月2日
- ② 佐々木祐『『二つのニカラグア』像の歴史
的再検討：カリブ海岸部の事例を手掛かり
として』、日本ラテンアメリカ学会第
32回定期大会、上智大学(東京都)、2011
年6月4日
- ③ 崎山政毅「沖縄の《現在》を思想史から
とらえなおす」、社会思想史学会セッシ
ョン報告、第35回大会、神奈川大学(神
奈川大学)、2010年10月23日
- ④ 崎山政毅、「社会民主主義の再検討」、社
会思想史学会セッション報告、第34回大
会、神戸大学(兵庫県)、2009年10月31
日

[図書] (計 5件)

- ① 崎山政毅 他22名著『20世紀〈アフリカ〉
の個体形成——南北アフリカ・カリブ・
アフリカからの問い』、平凡社、2011(崎
山担当分は647-675ページ)
- ② 原毅彦 他3名編著『エティック国際関係
学』、東信堂、2011(原担当分は43-62
ページ)
- ③ 原毅彦 他8名著『エティック国際関係
学』、悠書館、2011(原担当分は189-220

ページ)

- ④ 佐々木祐 他12名著『持続型生存基盤論
ハンドブック(第6巻)』、京都大学学術
出版会、2011(佐々木担当分は18-24ペ
ージ)
- ⑤ 崎山政毅 他28名著『文化の社会学』、世
界思想社、2009(崎山担当分は65-74ペ
ージ)

[産業財産権]

○出願状況(計0件)

○取得状況(計0件)

[その他]

6. 研究組織

(1) 研究代表者

崎山 政毅 (SAKIYAMA MASAKI)
立命館大学・文学部・教授
研究者番号：80252500

(2) 研究分担者

① 原 毅彦 (HARA TAKEHIKO)

立命館大学・国際関係学部・教授
研究者番号：20218621

② 佐々木 祐 (SASAKI TASUKU)

大阪市立大学・文学部・特任准教授
研究者番号：90528960